

『笈の小文』の問題点一、二：『伊賀餞別』と大仏再興周辺

井上, 敏幸
福岡女子大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/12092>

出版情報：語文研究. 44/45, pp.8-16, 1978-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『笈の小文』の問題点一、二

——「伊賀餞別」と大仏再興周辺——

井 上 敏 幸

はじめに

刊本『笈の小文』が、芭蕉の手になる草稿なのか、乙州の編集にかかるとのかについての論議は、すでに久しくまた周知のことであってここに詳説しない。

ところで、その肝心の問題がどのような手続のもとになされているかを考えてみると、意外にも実際の芭蕉の旅が把握されないままに論じられていることに気付くのである。この小論では、旅行当時の芭蕉の旅の実際をさぐるべく、『伊賀餞別』および大仏再興周辺をとりあげ、『笈の小文』の問題に対する私自身の一つの出发点としてみたい。

一 「伊賀餞別」の意味

「句餞別」は、いうまでもなく、貞享四年十月二十五日に江戸を立った芭蕉への餞別の漢詩・和歌・俳諧作品を集めたものである。従来、寛保版「句餞別」が広く行われていたが、富山葵氏の研究によって、寛保版には脱落があり、書名もまた不充分で、原名は「伊

賀餞別」であったこと、しかもこの書名は芭蕉自らが名付けたものだったことが明らかになった。^(註)「句餞別」が「伊賀餞別」であったことの意味は問われねばならない。少くとも『笈の小文』の旅の目的が、まず伊賀へ帰ることであったことを暗示しているように思われるからである。

いま、『伊賀餞別』一巻を繙いてみると、全体に共通した一種の危機感が流れていることに気付く。

芭蕉老人有^レ故、赴^二郷国^一。老人常謂、他郷即吾郷。今猶莫^レ作^二戲斯語^一、吾何不^レ信^二斯語^一乎。因綴^二卑語^一三絶^一以投^二頭陀^一。

其一

君去^二蕉庵^一莫^レ止^レ郷、故人多^レ勉^レ即成^レ郷
風淪露宿豈^レ勞^レ意、胸次素無^レ何有^レ郷

其二

弱笠瘦筇寄^二一身^一、離筵回^レ首惱^二吟身^一
河辺楊柳無^二由折^一、早動翠条迎^二老身^一

其三

陰月称二陽又小春一 小春又那似二陽春一
擧レ孟皮裏陽春在 為唱陽関一曲春

「故有て郷国に赴く」芭蕉を送る菜堂が最も恐れたことは、詩其一にいうごとく、芭蕉が江戸を去ったまま、「郷に止」まってしまうことであつたらしい。その恐れのために、詩其二においては「楊柳をあえて折ることをしない」のであり、詩其三においては、再会を期すべき来春のことをのみ歌っているのである。

翁の故郷に帰給ふを送りたてまつる

我ちから爰しほらん雪の道
と餞別の一句を作つた松倉風蘭は、「なをたらず唐うたの古風をか
りて俳諧をのぶ」として一篇の詩を寄せているが、その中に

佳景幽勝ノ地 只恐ル久ク認^レカト蹤^ヲ

といった句を見いだす。文脈からみて「佳景幽勝ノ地」は、芭蕉の郷里伊賀上野でなければならぬ。

ゆくととも

たちかえる浪をこゝろにわするなよ世を海しらぬ国に
という原安適の歌は、さらに直截であろう。「餞別二四六八十言 鄙詞
不レ章故旁點」と題された友松政宣稿の詞章の中には、「君は往く
伊州の別業」といった表現も見受けられる。

一般に餞別の詩歌文章が、その内容として再会を強調するものであることを考慮すると、以上に引用した作品中の語調には、この旅立ちの芭蕉に、何か伊賀へ帰らねばならない事態、あるいは伊賀に永住することになるかも知れない何らかの事情を臆測させるものがある。さらに、そのことを門人達が知っていたのではないか

と思わせるものもある。「故有て」とはいかなる事情があつたのか、「伊州の別業」とは、伊賀に「久しく蹤を認ん」とはどういう事態が予測されていたのであろうか。

従来の研究では、今回の旅の目的について、元禄元年（貞享五年九月三十日或云二月十八日の亡父の三十三回忌の法事に出席すること
があげられているだけである。しかし、これのみでは芭蕉が伊賀に
留る理由になるとは考えられない。このこと以外に、直接この旅の
目的を述べたものを見いだせない。だとすれば、この時期に芭蕉
が残した作品・書簡、ないしは門人達の記録類の中にそうした理由
をさぐる以外に方法はないであらう。

そこで書簡から見えていくと、まず注目されるのが病気の「姉者人」である。この「姉者人」についての記事は、貞享末年頃筆と推定される半左衛門宛書簡と、元禄元年九月十日付卓袋宛書簡とに見い出される。

かれらが事までは拙者など唾着いたすはずに而も無ニ御坐一候
へ共、一はあねの御恩難^レ有^二、大慈大悲の御心わすれがた
く、色く心を碎き候へ共、身不相応之事難^レ調^二候。其身四
十年余寝てくらしたる段、各々様能御存知に而御坐候へば、兎
も角も片付様之相談ならでは調^レ不^レ申、さてく慮外計申上
候。御免可^レ忝候。以上
(半左衛門宛)

「名護屋迄之御状、并加兵へ持参、共に相達し候。先以姉者人
御事、兼急々に見請候故實様ヲ別而頼置申候処、愈御見届、大
慶に存候。一兩年不自由不調之事共、さてく残多いたはしく
存候。(一書)
(柏原市兵衛(卓袋)宛)

「あね」「姉者人」は同一人物であろう。通説では、この人物は

芭蕉の成長に重要なかわりをもった人物で、あるいは兄半左衛門の妻であつて、元禄元年三月頃重病、同じ年七・八月頃没した人物かと推定されていたが、村松友次氏は、この人物を、芭蕉の妻の姉

ではないかと推定され、貞享末年の旅中少くとも二回は、この姉を嫁ぎ先に見舞つてゐるのではないかという仮説を提出された。^(注3) 柘植

山出村の竹島四郎左衛門景勝の妻となり、元禄十年に没し、法名を「湖岸栄江大姉」と称された人物で、その嫁ぎ先で重病におちいつており、初回は、貞享四年の年末、名古屋より帰郷の途中、亀山・

関・鈴鹿を経て柘植經由の道で姉を見舞い、かなりの日数を看護についやしたかと推測されている。二回目は、元禄元年三月十六日から三日間、急に姉の容態が悪くなつたと聞いて、杜国との吉野旅行出発を遅らせ、三日間ほど看護し十九日に出発したのではないかとされている。この仮説は興味深い。名古屋より帰郷の途次、山出村に立寄つて数日(十日以上の日数を考えてもよし)を過したとすれば、この間やや長すぎる旅程もつじつまが合つてくる。

古郷や臍の緒に泣くとしのくれ

の詞書に、「代々の賢き人々も、古郷ハわすれがたきものにおもはえ侍るよし。我、今ハはじめの老も四とせ過て、何事につけても昔のなつかしきままに、はらからのあまたよはひかたぶきて侍るも見捨てがたくて、初冬の空のうちしるる比より雪を重ね、霜を経て、師走の末、伊陽の山中に至る」と、自ら書きつけていること、帰郷の目的の一つに、年老い、また重病におちいつている「はらから」たちを見舞うことがあつたと考えて間違いないであろう。またこうしたことが、かなり時間を必要とする事柄と考えられたで

あろうことも想像できるのである。

次に書簡を読んでいて気付くことは、主家藤堂家との関係である。

刊本「笈の小文」に詞書もなにもなく、

さまざまの事おもひ出す桜哉

の句が載つてゐるが、この句は、元禄元年春、芭蕉が伊賀滞在中のある日、故主蟬吟の嫡子探丸子(藤堂忠長、この年二十三歳、禄高五千石)の花見の宴に招かれたおりのもので、探丸子の脇「春の日はやくふでに暮行」が付けられたことを諸書は伝えている。

この前後の人々との交流、またその後の芭蕉と探丸以下の上流武士たちとの俳諧における継続的つながり(注4)を考へる時、この花見は、単なる花見ではなかつたように思えてならない。そのことを暗示しているのが、元禄二年九月十日付卓袋(推定)宛書簡なのではあるまいか。

去年京屋方(かた)が被_レ申越_一候、旦那御下屋布(敷)に御置可_レ被_レ成よし内証有_レ之候へ共、他客見舞も、存知(のり)之外衆も有_レ之、又各々出入も遠慮有_レ之候間、わき(く)にて小借屋有_レ之候はゞ御かり候様(の)御心当可_レ被_レ成候。なる程(わび)忙(わ)たる分はくるしからず候。予(應)

旦那は探丸その人である。その屋敷に置くという内証は、芭蕉にとって重要な意味を持つたであろう。主家よりの招請と解してもよいことだったからである。この内証が伝えられたのは、元禄元年、花見の宴の前後かということも考えられてよいわけであるが、そうした時期の書簡としてふさわしいものに次のようなものもある。

今朝自とも旦とも那樣おさかな一御肴頂戴仕、難レ有奉レ存候。私宅に而ては女兄弟共打寄頂戴仕、又権右衛門方に而念比とも之もの共寄合戴申候。さて今日は権右衛門方に寄合罷有候。後程御礼に参上可仕候。以上

この書簡は、筆蹟より貞享元・二年頃のものだとされているが、貞享初年の頃に藤堂家と芭蕉との關係を示す資料は全くなく、両者の關係が貞享末年頃より生じていることを考えてみると、この書簡はおりのものとも考えられるのである。

ところでこの探丸子よりの招請一件は、あるいは江戸を出発する芭蕉にすでに伝えられていたのかも知れない。というのは、今回の芭蕉の旅をめぐる藤堂家の人々の動きが、かなり活発だったからである。

まず、帰郷中の芭蕉の滞在先が、正月中は良品宅（藤堂藩士 友田角左衛門 禄高三百五十石）であり、二月下旬より二十日間にわたっては、苔蘇（藤堂藩士 岡本治右衛門）の瓢竹庵に杜国とともに滞在している。

その他、良品の妻梢風の父風麦（藤堂藩士 小川次郎兵衛政任）・土芳といった人々との俳交が何われ、この折の芭蕉は、もっぱら藩士たちと囲まれていたといつてよい。さらに注目されるのは、当時李丸と称していた良品が、貞享四年冬、旅立ち直前の芭蕉庵に顔を出していたのではないかと、富山氏の御指摘である。氏は、『叢虫庵集』冒頭部の記事、

友田氏李丸子より、深川の初雪とて一句消息して告来る。
猶逢てと書て、
梅さくやかのはつ雪のなつかし、
其返し待と申遣す。

たそかれをミセはや菜種ちらぬ内

を、「良品は貞享四年の冬は江戸に在って、深川の初雪の吟を土芳宛に送って、その批評を乞うたところ、土芳は、近日の再会を約して、その心を句に作って返翰したといふのである。さて、そうなる」と、良品は江戸深川の芭蕉庵で、『笈の小文』の旅立直前頃の芭蕉と会していると思なければならぬ。そしてその年末には、芭蕉の後を追うようにして伊賀に帰ったのである。」と解釈されている。

この解釈と、正月中の行動、風麦亭での会などを考え合わせると、「伊賀銭別」の中で、江戸の友人達が「郷に止」といい、「伊州の別業」に行くといった意味が裏付けられてくるのではあるまいか。藤堂藩士が、芭蕉庵に出入していることを江戸の門人達は知っていたであろう。そして、あるいは良品には、探丸よりの内証が伝えられていたのかもしれない。もしも、そうした事情を芭蕉自身を感じとっていたとすれば、芭蕉は、少くとも自己の考えを明確にすべく、一度は帰郷せざるをえなかったであろう。

こうした事情の中で成立したものが「伊賀銭別」だったのであるまいか。単なる「句銭別」ではなく「伊賀」の文字が芭蕉によって冠せられた理由を、私はこうした点に求めてみたいのである。

結果として芭蕉は、先の書簡に見たように探丸の招請を断ることになるが、主家の申出を断った芭蕉が、逆に自己の責任として背負い込んだものは何であったか。恐らくそれは、直接的には、探丸以下の伊賀の初心者達の句を多数収載した『猿蓑』の形にあらわれていると思われるが、芭蕉が、この時期にこうした問題を抱えつつ、自己の生きる道をさぐっていたのだと考えれば、『笈の小文』の旅の重要性が、改めて検討されねばならない問題としてうかがいあがってくる。

るのではあるまいか。

二 大仏再興周辺

刊本「笈の小文」には、奈良についての記述が二ヶ所見受けられる。

灌仏の日は、奈良にて爰かしこに詣侍るに、鹿の子を産を見て、此日においてをかしければ

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉

旧友に奈良にてわかる

鹿の角先一節のわかれかな

この奈良における芭蕉の行動を推測させるものに、次のごとき書簡三通がある。

大坂迄御状 忝 拜見、此度南都の再会、大望生々の楽ことばにあまり、離別の恨み筆に不レ被レ尽候。(中略)……………今は人々旧里にいたり、妻子童僕のむかへて、水きれいなる水風呂に入て、足のこむらをもませなどして、大仏の法事のはなしとり々なるべき。(下略)

元禄元年四月二十五日付惣七(猿蓑)宛

先日大坂よりも以二書状一申進候。奈良に而遊興、誠 旅中之慰み、与兵・貴様、御物入推量いたし候。猶追而具に可二申進申一候。(下略)

元禄元年四月二十五日付卓袋宛
南都のわかれ一むかしのこゝちして、一夜の無常、一庵のなみだもわすれがたう覚え、猶観念やまず、水上の淡きえん日までのいのちも心せわしく、去年旅より魚類肴味口に払捨て、一鉢境界、乞食の身こそたふとけれとうたひに佗貴僧の跡もなつか

しく、猶ことしのたびはやつし〜てこもかぶるべき心がけにて御坐候。(下略)

元禄二年閏正月(推定)猿蓑(推定)宛

これら書簡の内容と「笈の小文」本文とは、そのまま重っているわけであるが、具体的にいかなる事実があったかについては、両者ともに、いま一つ明確さを欠いている。わずかな距離であるはずの奈良において、しかも三月中旬まで一緒に居た連中との再会が、なぜ「大望生々の楽しみ」と表記されたのか。「大仏の法事のはなし」は、年中行事の仏生会でよかったのか。「離別の恨み」とは何を意味していたか、等々である。

いかにもオーバーな表現を裏付ける大事件が、実はこの時奈良において展開されていたのである。それは、大仏再興という歴史的大事件であった。元禄の大仏再興を実現させた勸進僧公慶上人に関する諸記録によれば、元禄元年四月二日より八日までの一週間、僧千口・工匠五百人を招き、大仏殿新始の規式がとり行われていたことが知られる。そして、この規式に群った見物人の数は、四月八日の結願の日には、実に六十八万余人であったといわれている。

芭蕉と伊賀の人々の出会いは、この空前の群衆の中でのことであった。であれば、書簡中の「再会」ということばも実感的に受とることができる。また、「大望生々の楽しみ」という表現も、例年の仏生会ではなく、大仏殿再興の新始の規式を考えてみれば、オーバーな表現でもないであろう。「大仏のはなしとり々なるべき」は、この意味において始めて諒解できるはずである。以下、この歴史的大事件であった大仏再興と、「笈の小文」の旅における芭蕉が、どのようなかわりを持つものであったかについて考えてみたい。

まず、この出来事を芭蕉が江戸出発の時点において知っていたかどうかであるが、元禄元年二月十九日付宗七宛書簡などからみて、あるいはこのことを知っていたかとも思える。

江戸・参川^{まが}がばんに二人来候而、明日奈良へ通候間、今夕宗無同道に而御出御語可^レ被^レ下候。吾人は宗無もちかづきにて御坐候。

文中中の二人は、江戸の僧宗波と杜国のことであるが、この二人が「明日奈良へ通る」という一文は、大和見物をかねた新始の規式への参加のように思われる。結局奈良へ行ったのは宗波一人で、杜国はその後芭蕉と行動をともし、四月八日の規式に参加するが、この二人の行動、特に宗波のそれは、芭蕉が江戸を出発する時に約束みのことだったとも考えられる。杜国についても、三河を尋ねた芭蕉との間にこの話が出たかとも推測できる。二月四日、二人は伊勢で落合い、以後、伊賀・吉野・明石・京と行動を共にするが、そうした約束の時に、大仏のことが話題になったとも限らないからである。ただし、両者ともに推測の域を出るものではない。

次に問題となるのは、二月始め、伊賀新大仏寺に詣で、^(注)佛文「伊賀新大仏之記」をものしていることである。「芭蕉庵小文庫」の文章は、「伊賀の国阿波の庄に新大仏といふあり。此ところはならの都東大寺のひじり俊乗上人の旧跡なり。ことし旧里に年をこえて、旧友宗七・宗無ひとりふたりさそひ物してかの地に至る」という書出しで始まるが、伊賀新大仏寺は建久末年あるいは建仁二年、当時の大仏再建の勸進僧であった俊乗坊重源によって創建されたものであった。また、伊賀の国の四庄、阿波・広瀬・山田・有丸が、平家の没官地であったため、建久元年十二月、大仏鑄造の料として

宋の鑄師陳和卿に与えられ、その後陳和卿が、これを東大寺領として寄進したことも知られている。芭蕉当時は、寛永末年頃の山崩れによって、本堂は押潰され、三尊像も破壊されて、ただ中尊の頭部だけが残っているという荒廃の極にあったが、こうした寺跡を尋ねようとした動機は明らかに今回の大仏再興との歴史的対比において発想されたものと考えられる。

芭蕉の文章は、「御仏ハしりへなる岩窟にたゞまれて、霜に朽^く苔に埋れてわずかに見えさせ給ふに、御ぐし斗^はいまだつゝがもなく、上人の御影^{みかげ}をあがめ置たる草堂のかたはらに安置したり。誠にこゝらの人の力をつひやし、上人の貴願いたづらになり侍ることもかなしく、涙もおちて談^{はな}もなく、むなしき石台にぬかづきて」と続くが、この寺跡において芭蕉は、五百年の時間の流れを実感していたのである。

続いて伊勢に二週間ほど滞在するが、不思議なことに、ここでもまた芭蕉は、俊乗坊重源の事跡に接することになる。

滞在中のある日、芭蕉は龍尚舎を尋ね

物の名を先とふ芦のわか若哉

という一句を呈している。龍尚舎、龍伝右衛門源近は、貞享元年の旅の芭蕉に宿を提供した松葉屋風瀑邸の筋向いに大邸宅をかまえた、伊勢俳壇の中心的人物であると同時に、有力師職でありかつ著名な神道学者でもあった。彼は、仏教的神道思想を伊勢に広め、また著作活動も多かった人物である。^(注)この龍尚舎が書写して伝えられた書に、『東大寺衆徒參詣伊勢大神宮記』一卷がある。その奥書によれば、この書は、たまたま尾州の真福寺宝生院に赴いた折に一見し、書写して一部を伊勢の徴古館に残し、別に一部を東大寺に送っ

たものであった。書写したのは延宝四年の冬である。この書は、鎌倉初期の大仏再建の勸進僧俊乗坊重源が、大仏再建祈願のため僧綱以下六十口の衆徒を率いて神宮に参詣した次第を記したもので、神宮参拝記と称せられる文献の最古のものであった。

芭蕉が、このことを龍尚舎より直接聞いたという徴証はうべくもないが、龍尚舎が延宝九年に編纂し刊行した『新編伊勢名所拾遺集』^(注1)に、俊乗坊重源のこの折のことを詳述していることが注目される。度会郡「天覚寺」の項の説明に、

天覚寺ハ二見の郷にあり。内宮一ノ称宜荒木田ノ成長建立ノ地也。文治二年の春の比、俊乗坊重源上人、東大寺造宮の靈夢を蒙り、両大神宮に大般若經各一部奉納せらる。外宮の宿坊ハ常明寺、内宮の宿坊ハ天覚寺。貴僧六十口雜人七百余輩、五ヶ月天覚寺に逗留、成長神主饗應せらる。其内一日、二見の浦の風景を見んとて僧侶小童相伴て、遊興ノ和歌左に備ふ

という一文があつて、僧侶の歌六首を掲げている。この名所集は、さすがに地元の研究者の手になるものだけあつて、一般の名所集と違つた味わいがあり興味深いものであるが、問題はこの書を芭蕉が読んだ徴証があるかどうかである。

刊本「笈の小文」伊勢の条に、

菩提山

此山のかなしさ告よ野老掘の一句があるが、この句は、「新編伊勢名所拾遺集」を読むことによつて成立したものだつたように思われる。同書の度会郡「菩提山」の項には、次のような一文がある。

宇治ノ郷中村の東の山下、菩提山神宮寺といふ。中村より菩提

山の間、五十鈴河の流れの末に橋を打わたしてかよふ。昔ハ大伽藍にて丈六堂・本堂・多宝塔・経藏・宝藏など有けれど、龜山院御宇弘長一・十一月廿九日の回祿に悉く灰燼と成しよし古記に見えたり。今只丈六の仏殿のミ有。天平神護二年九月に丈六の仏像を伊勢太神寺に造ると統日本記にあり、此寺の仏像のよし古老の伝也。又慶長の比称往上人と云し遁世者神宮寺の奥に一字を建立す、是を称往院といふ。

伊勢にて菩提山上人月に対して述懐せしに
山家集^(注2)めぐりあハて雲るのよそに成ぬとも月になれ行くむつび忘るな

西行

「菩提山」が、芭蕉の来訪当時は荒廢していたこと、また、天平の世に、大仏を創建した聖武天皇の勅願寺であつたこと(兼忠告著「宮川夜話」宝曆十一年感)などは、奇妙に伊賀新大仏寺と似通つていえる。芭蕉の詞書と句は、実にこうした歴史的事実を踏まえうえでの創作だったのである。また、この「菩提山」が、西行谷・餓鬼谷などと同一の地にあり、「西行谷・菩提仙の芳隣孤ならざる徳とかや、世の隠倫道士のうらやむ所也」(写村弘正著「勢州古今名所集」明曆・万治間成立)とよばれた所であつたことも注意されてよいであらう。貞享元年の芭蕉は、西行谷を訪れているが、その時は「菩提山」について何ら触れることはなかつた。ということは、今回の旅において、芭蕉が深く大仏再興の古跡に對して興味を懐いていたからこそ、龍尚舎の著述、あるいはその著述者にじかに接することによつて、その興味が増幅された結果だといつて間違いないであらう。

菩提山を訪うた芭蕉は、現代の大仏再興事業の進展を、約五百年前の頼朝・西行らの時代のそれに、さらには天平の世の事業にさか

のほらせて把握しようと様々に思惟していたといつてよいのである。こうした思考方法は、そのまま芭蕉の名所古跡における創作手法につながるものだったように思われる。

結語

「伊賀錢別」と名付けた芭蕉の心境を重視しすぎたきらいがあるのかも知れないが、「笈の小文」の旅を考える場合、貞享四年十月より、翌年三月十八日（社国ともに吉野に旅立つ直前まで）までを、一つのまとまった期間として検討しなすことが必要なのではないかということを痛感する。

良品と深川の芭蕉庵で会った時から、伊賀を旅立つまで、対藤堂家の問題は持続していたはずである（勿論、終生持続するものと考えなければならぬ事柄であるが）。また、名古屋より掃郷の途次に見舞った姉の問題も、旅立ち直前（以後もまでも持続的な重要問題として芭蕉にのしかかっていたようである。こうした一身上の問題に沈淪しつつ、そこから新たな自己の生きる道を見いだしていく期間として、芭蕉の伝記研究のうえからも、この時期は再検討されねばならないであろう）。

また、今回の旅における芭蕉の作品を見て、鳴海周辺での作品、伊羅廣紀行真蹟の存在、俳文「伊賀新大仏之記」、さらに俳文「伊勢参宮」、「伊勢懐紙」などに伺える芭蕉の創作姿勢には、貞享四年以前の芭蕉とは自らに異った新たな姿勢が伺えるように思う。

いま、大仏再興周辺をのみとりあげたが、そこに見られる芭蕉の創作態度、その名所・古跡に自らを置き、そこに流れている歴史的

時間と同化することによって、その名所・古跡の本質をとらえようとする姿勢は、少くともこの時期に顕著となった態度なのであるまいか。

注

- 1 「笈の小文」をめぐる諸論に、宮本三郎氏、「笈の小文」への疑問上・下、「文学」昭45・415、高橋正次氏、「笈の小文」の序破急三連構成について、「国語と国文学」昭46・11、阿部正美氏、「笈の小文」の成立、「連歌俳諧研究四十七号」昭49・8、上野洋三氏、「笈の小文」幻想篇「鳥居清経」俳諧文」（昭51）所収、尾形功氏「鎮魂の旅情―芭蕉「笈の小文」考―」、「国語と国文学」昭51・1などがある。
- 2 同氏、「伊賀錢別」と「句錢別」、「伊賀旅門の研究と資料」（風間書房 昭45）参照。
- 3 同氏、「芭蕉の姉について―芭蕉生誕地はどこか―」、「芭蕉の姉について 続考」
- 4 「芭蕉の作品と伝記の研究―新資料による―」（笠間書院 昭52）参照。
- 4 元禄二年より百歳（曾孫の鈴屋重の子、西島家をつぎ十郎右衛門）、元禄三年より橋本（藤堂九兵衛、老職加判奉行、禄高千五百石）、元禄六年よりは玄虎（藤堂長兵衛家第四代守表、禄高千五百石）らが、芭蕉と俳席をともにするようになる。富山氏「伊賀旅門の研究と資料」参照。
- 5 「伊賀旅門の研究と資料」56頁。
- 6 形式は四月二日より八日まで行われたが、この間には二日の「聖武天皇御忌日」、五日の「重源上人命日」とが重ねられていた。奈良県立奈良図書館蔵フィルム、玉井家文書「大仏殿再建記」による。猶、同文書には第一日（四月二日）の「見物并参詣の人数」を四十万余と記す。公慶上人については東大寺編「公慶上人年譜集英」（昭29）が詳細である。
- 7 芭蕉が新大仏寺を訪ねた日次は、現在のところ確定できない。今泉藤二氏紹介の「蕉翁全伝附録」所載の「伊勢懐紙」冒頭に「阿波大仏 丈六にかけろふ高し石の跡」とあることから（「連歌俳諧研究四十八号」昭50・1）、伊勢参宮の途次二月三日頃かとも考えられるが（お別字氏「芭蕉の「丈六」の句文について」、「会報大阪俳文学会 十号」昭51・9）、通説の二月十九日以降三月十八日迄とする考えも捨てがたい。ただし、季語「かげろふ」（増山井 二月）からみれば、二月中と考えるのが妥当か。
- 8 小林剛氏「後乘坊重源の研究」（有隣堂 昭46）291―294頁参照。
- 9 富山泰氏「伊勢の芭蕉俳跡（その二）」、「四天王寺女子大学紀要四号」昭46・12。
- 10 「大神宮叢書 神宮参拝記大成 全二」（昭12）所収。猶、同書解題参照。

11 和歌山大学附屬図書館真砂町分館の紀州藩文庫本による。同大学柏原卓氏の御好意に感謝する。

12 この詞書と歌は、延宝三年刊『西行法師家集』雑の部に、「いせにて菩提山上人対月述懐時に、めくりあはて雲のよそにハ成ぬとも月になれ行むつひ忘な」として出ており、文明十二年奥書の『西行物語』にも類歌がみえる。

付記 小論は、昭和52年6月5日の九州大学国語研究会において「元禄元年の芭蕉」と題して発表したもの一部に加筆したものである。

受贈雑誌(昭和五十二年四月～昭和五十三年三月)

愛知県立大学文学部論集・国文学科編26／愛知大学国文学15・16／愛文(愛知大)13／青山学院女子短期大学紀要31／青山語文7／アカデミア・文学語学編24／跡見学園国語科紀要25／愛媛国文研究27／愛媛国文と教育8／王朝文学史稿4／5合／大阪大学医療技術短期大学部研究紀要9／大阪大学教養部研究集録25／大阪樟蔭女子大学論集14／大谷女子大國文7／大妻國文8／沖繩国際大学文学部紀要・国文学篇5卷2・6卷1／御伽草子研究2／折口博士記念会紀要1・2／学苑451／学園論集(北博学園大)30・31／学芸芸語国文学(東京学芸大)13／学習院大学国語国文学会誌21／学習院大学文学部研究年報23／學術研究報告(高知大)26卷2／4合／学大國文(大阪教育大)20・21／香椎鴻(福岡女子大)23／金沢大学法文学部論集・文学篇24／金沢文庫研究23卷2・3・4・5・6／漢学紀要(国士館大)1九州文化史研究所紀要22／京都家政短期大学研究紀要16／京都教育大学国文学会誌13／近世文学稿(広島近世文学研究会)22・23／近代文学論8／近代文学論集2・3／
くれない4／訓点語と訓点資料60／

研究紀要(日大人文科研)19／研究論集(開成中学・開成高校紀要)5

／言語と文芸85／言語文化(二橋大)13／

皇学館論叢10卷1・2・3・4・5／高知大國文8／甲南國文24

／神戸外大論叢27卷1／3合／高野山大学国語国文3／語学文学

(北海道教育大)15／語学文学研究(金沢大)7／国学院雑誌78卷2・

3・4・5・6・7・8・9・10・11・12／国学院大学紀要15／国

学院大学大学院文学研究科論集3・4・5／国学院大学日本文化研

究所紀要38・39／国学院大学日本文化研究所報14卷1・2・3・4

・5・6／国語学109・110・111／国語学研究与資料2／国語研究

5／国語国文46卷2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・

47卷1／国語国文学(名古屋大)41／国語国文学研究(熊本大)12・13

／国語国文学報(愛知教育大)31・32／国語国文研究56・57・58／国

語国文論集(安田女子大)7／国語と教育(大阪教育大)7／国語と教

育(長崎大)1・2／国語と国文学54卷5・6・7・8・9・10・

11・12・55卷1・2・3／国語の研究10／国文(お茶の水女子大)47・

48／国文学(関西大)51・52・53・54／国文学研究(早稲田大)61・62

・63／国文学研究(東北大)16／国文学研究会報(慶応大)16／国文学

研究資料館紀要3／国文学研究資料館報8・別冊1・9／国文学研

究ノート(神戸大)8／国文学叢(広島大)74・75／国文学雑誌(麗女子

大)21・22／国文学論集(上智大)11／国文学論集(山梨大)15／国文

学論叢22／国文研究(香川大)2／国文研究(關西女子大)10／国文鶴

見12／国文目白16／国立国語研究所年報28／国立国語研究所報告59

／古代研究8／古典と民俗4・5／語文(大阪大)33／語文(日本大)

43／語文論叢(千葉大)5／駒沢国文14